平成28年熊本地震に学ぶ

南海トラフ地震に備えて

本年４月に発生した熊本地震は、多くの犠牲者が出る深刻な災害となりました。特に、震度７の非常に強い揺れが短期間に２度発生したことにより、家屋の倒壊が数多く発生するなど、家屋倒壊の危険性が再認識されました。

次期南海トラフ地震においても、相当規模の余震が頻発する可能性があるため、住宅の耐震化を加速化させるなどの対応が求められています。

問　旧耐震基準で建築された木造住宅の戸数と耐震化率、耐震改修の補助内容について聞く。

答　本市において、昭和56年５月以前に建築に着手された旧耐震基準による木造住宅は、平成25年度に実施された国の調査を基にした推計で約３万７千棟、耐震化率は27年度末で62％となっている。

また、旧耐震基準による木造住宅への耐震診断を実施した結果、一定の基準に満たない場合は、１棟当たりの耐震改修にかかる設計費に20万５千円、改修工事費に92万５千円を、それぞれ上限額として助成している。

問　住宅耐震化率の向上にどのように取り組むのか聞く。

答　本市では、平成28年度からの３年間に、毎年６００件の木造住宅を耐震化することを目標にしている。

現在、耐震化を進める上で支障となっている住宅所有者の経済的負担を軽減するため、本年10月から、耐震改修の設計費や工事費の補助金を本市から直接事業者に支払う代理受領制度を実施する。

また、耐震診断を受けていない旧耐震基準の住宅所有者に対しては、個別訪問により耐震改修の必要性の説明を行い、耐震診断を無料で受けていただくことで、耐震改修工事を促進したいと考えている。

本市は、熊本地震の発生直後の４月16日に高知県緊急消防援助隊の隊員24名を派遣した後、避難所の活動支援や被災建築物の応急危険度判定、給水活動支援など、延べ３７０人余りの職員を派遣し、積極的な支援を行いました。

問　熊本地震の現場で得た、本市の課題等について聞く。

答　本市職員は、現地においてさまざまな支援活動に携わったが、被災時の災害対応を被災自治体の職員のみで速やかに行うことは難しいと感じた。

特に、災害対策本部が初動段階で混乱し、情報収集体制や避難所運営、支援物資の受け入れなどに適切な人員配置ができていなかったことなどは、一つ一つ検証し、検討を加える必要がある。

また、今回の教訓も生かしながら、事前の対策を推進するとともに、現在策定中の業務継続計画を充実させることで、南海トラフ地震における迅速な復旧・復興に結び付けたい。

問　熊本地震では福祉避難所が課題となったが、本市の状況を聞く。

答　現在、本市では33か所の福祉避難所を指定しており、収容可能人数は３８００人余りとなっているが、南海トラフ地震では最大１万人の要支援者が避難所に避難すると想定されているため、今後も指定拡充を図る必要がある。

また、熊本地震の教訓として、福祉避難所を支える支援者の確保が不十分であったこと、広域的な避難を余儀なくされ交通手段の確保が困難であったこと、多様なニーズを持つ被災者にきめ細かく対応することが困難であったことなどが指摘されている。

このため、福祉避難所の運営体制を構築するために、運営に関する指針を策定し、施設ごとにマニュアルを作成してもらうよう働きかける。

録画配信（インターネット）

過去１年間の本会議（定例会）について、インターネットで配信しています。

高知市ホームページから議会中継（録画）専用ページに入ると視聴できます。会議日や質問議員名、発言内容の語句等からの検索も可能です。

会議録の閲覧

６月定例会本会議の会議録は９月上旬にできる予定です。

本町仮庁舎１階の情報公開センター、同６階の議会図書室でご覧になれます。

また、高知市ホームページ上で、本会議は平成６年12月定例会以降、委員会は16年４月以降の会議録をご覧いただけます。

武市瑞山の思いにはせる

新緑薫る５月11日に、武市瑞山（通称半平太）の１５１年例祭に参列させていただいた。

例祭式の後、瑞山をしのぶ大勢の方々の前で、記念講演、詩吟、迫力ある居合抜きや詩舞が行われた。また、地元の保育園児たちが真剣に楽器の演奏を奉納する姿はとても印象的で、これからの未来を担う子どもたちを大変頼もしく感じた。

武市瑞山は土佐勤王党の盟主として、国を改革していこうという強い志と正義感を持ち、その実直な性格は自由奔放な龍馬とは正反対でありながらも、龍馬の良き理解者だったと言われている。

日本をより良くしたいという土佐の偉大な先人達の大いなる志を、子どもたちの世代に受け継いでもらいたいと願わずにはいられない。

ところで、県市連携の取り組みとして、来年は大政奉還１５０年、龍馬没後１５０年などの記念行事があり、平成30年には明治維新１５０年と、歴史を中心にした博覧会の開催などが予定されている。さまざまなイベントを単発でなく関連付けて、私たち一人一人があったか土佐のおもてなしで高知の魅力をさらに全国に発信し、年齢層を問わず多くの方々に『土佐の高知』に足を運んでいただき、魅力を感じてもらいたいと願っている。

（議会広報委員　伊藤弘幸）

休憩室